

# 福井県三方町牛屋遺跡から出土した弥生時代以降の 木材遺体群

著者	植田 弥生, 辻 誠一郎
著者別表示	Ueda Yayoi, Tsuji Sei-ichiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	38
号	1
ページ	43-50
発行年	1990-06-25
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00055941">http://doi.org/10.24517/00055941</a>

## 植田弥生\*・辻誠一郎\*：福井県三方町牛屋遺跡 から出土した弥生時代以降の木材遺体群

Yayoi UEDA\* and Sei-ichiro TSUJI\* : Wood  
Remains since the Yayoi Period Obtained from  
the Ushiya Site in Mikata, Fukui Prefecture

### Abstract

We describe the geological occurrence and specific composition of the wood remains obtained from two horizons, the H bed and the C and D beds, in a geological sequence of the upper alluvium corresponding to the archaeological age since the Yayoi period. The wood remains from the H bed mainly include several stumps and roots of *Cryptomeria japonica* and *Aesculus turbinata*, and some artifacts that were a part of a human dwelling. The remains from the C and D beds form a transported fossil assemblage derived mainly from a rear slope. These occurrences and specific compositions show a wetland forest consisting mainly of *Cryptomeria japonica* and a rear forest including temperate conifers and deciduous broad-leaved trees and such warm-temperate evergreen broad-leaved trees as *Cyclobalanopsis*, *Castanopsis*, *Machilus* and *Cleyera japonica*.

**Key Words:** Holocene—Paleoecology—Vegetation history—Wood remains

若狭湾沿岸では、完新世初頭からすでにスギや照葉樹林構成要素があったことが花粉化石群集の消長から明らかにされている（安田，1979；高原・竹岡，1987など）。また最近では、低地に分布する弥生時代以降の遺跡から、スギが異常に高い頻度を占める加工木群が知られるようになり（鈴木・能城，1988；島地・林，1988），三方五湖低地南部の岩屋では約3000年前のスギの埋没株も報告されている（高原ほか，1988）。このように、若狭湾沿岸域における完新世植生史はスギや照葉樹林要素の卓越で特徴づけられることなど、その概要が急速に明らかになってきたが、植物群の分布拡大と衰退の歴史、とくに低地とその縁辺における古地理・古環境変化との関わりや人間との交渉史についてはあまりにも資料が乏しい。

筆者らはこうした点に着目して三方五湖低地における植生史の研究を続けているが、1988年11月、三方町教育委員会によって試掘調査された牛屋遺跡を調査する機会に恵まれ、完新世後半の古植生・古地理復元に有効な若干の資料を得ることができた。小論ではそれらのうち、2層準の泥炭質堆積物から出土した加工木を含む木材遺体群の産状と樹種同定の結果を記載し、植生史研究上の意義について述べる。なお、加工木と遺構の考古学的記載ならびに樹種の木材解剖学的記載は近年刊行予定の遺跡発掘調査報

告書に譲ることにする。

三方町郷土資料館・教育委員会は筆者らに調査の機会を与えられた。とくに郷土資料館の田辺常博氏には現地での試料採取その他に多大の協力を頂いた。金沢大学教養部鈴木三男氏、農林水産省森林総合研究所能城修一氏には樹種同定について貴重な助言を頂いた。以上の方々に感謝いたします。

### 調査地の概況と木材遺体の産状

#### 1. 概況

調査地の牛屋遺跡は三方湖の南方に広がる低地の北縁に位置し、南に開けるポケット状低地一帯に広がりをもつ（Fig. 1）。著名な鳥浜貝塚は約750 m東に位置する。

南方に広がる高瀬川流域の低地は南西方に向かって高くなり、向笠集落一帯では扇状地となる。1988年の圃場整備工事の際、この扇状地をなす礫層が高瀬川流域の低地下に連続し、灰色シルト層の下位に厚さ不明の礫層として広く分布することが観察された。同質の礫層は後述するように牛屋遺跡の堆積物の最下部に確認される。

1988年秋の試掘調査は主に牛屋遺跡の東側が対象とされ、2×4 mのトレンチが掘られた。筆者らが調査対象としたトレンチは、Fig. 1に示したJ-86、J-88、J-89、I-93-2の4か所である。位置は概ね北緯

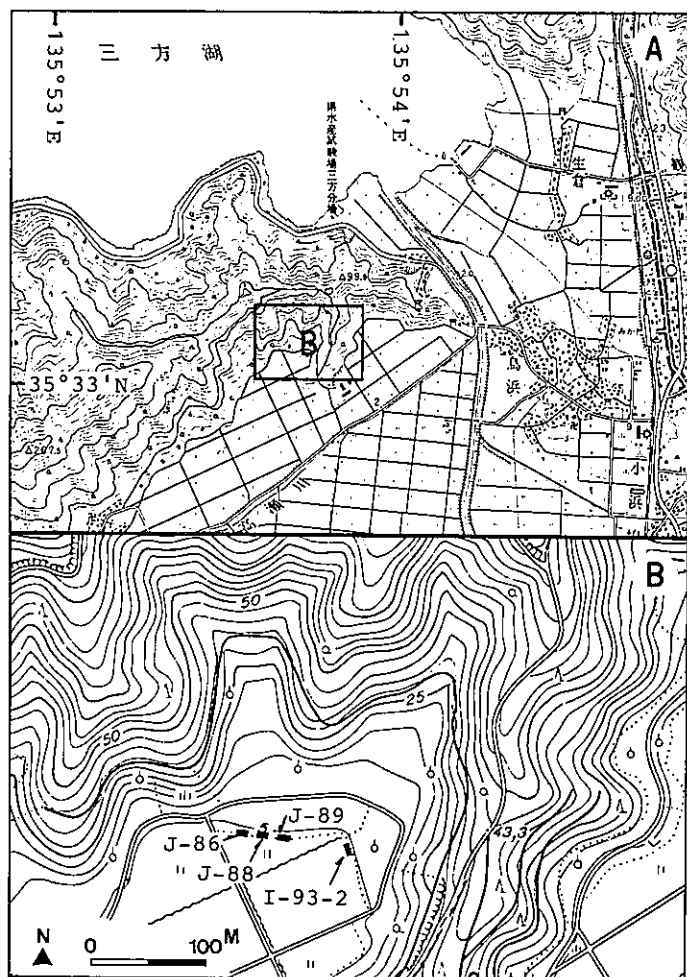


Fig. 1. Locality of the study site.

35°33'5", 東経 135°53'40", 地表の標高は約 3.7~4 m である。

## 2. トレンチの地質層序

Fig. 2 は調査した 4 トレンチの地質柱状図を示す。また Fig. 3 A は、J-89 トレンチ壁面の写真を示す。トレンチ壁で確認された堆積物は厚さ約 1.5 m, 一般に層相の変化が著しいが、図示したように、上位から A~I の 9 層に便宜的に区分される。各層の境界は比較的明瞭である。

A 層は灰~褐色砂質シルトからなる現在の水田耕作土である。B 層は灰色砂質シルト、礫質砂ないし礫からなり、層相変化がとくに著しい。C 層は褐色シルト質泥炭ないし泥炭からなる。草本・木本植物遺体に富み、木材遺体、弥生中期土器片、拳大の異質礫が散在する。D 層は主に角礫からなり、木材遺体、弥生中期土器片を疎らに含む。局所的分布をし、J-89 トレンチでのみ確認された。E 層は灰褐色泥炭

質シルトからなり、下部に異質礫を含む。また、I-93-2 トレンチでは葉を主とする植物遺体片の葉理が見られる。F 層は灰色シルトからなり、ヒシの果実が比較的多産する。J-86 トレンチでは、下部が泥炭質シルトになる。G 層は灰白色粘土質シルトからなり、層厚は 10 cm に満たないが連続性が高い。H 層は褐色シルト質泥炭ないし泥炭からなるが、ふつう上部がシルト質泥炭、下部が未分解の植物遺体のみで構成される泥炭からなるので、Ha と Hb に細分することができる。下部には木材遺体が散在し、加工木からなる遺構が埋没する。I 層は緑色岩を主とする亜角礫ないし角礫からなる。

これら 9 層のうち、粗粒碎屑物を主とする B 層と D 層は局所的に形成された崖錐性の堆積物と考えられる。いずれも J-89 トレンチを中心に認められるので、このあたりが背後の斜面からの水流の通路であると考えられる。D 層は対比断面図からも分かるように、下位の E 層を削り込んで堆積したとみられる。

堆積物の編年は、遺構を伴った現地性の高い土器群が出土していないので不十分であるが、周辺域の遺跡群との対応からおおよその時期を類推することができる。すなわち、牛屋遺跡の南東方約 1.5 km に位置するえご遺跡では、表層部をなす一連の沼沢地成堆積物が確認され、牛屋遺跡同様、上下 2 層の泥炭層と狭在するシルト層に区分されている (田辺, 1988)。それらのうち下層と上層の時期は、それぞれ弥生時代後期末から古墳時代初頭頃、奈良・平安時代頃と考えられている。えご遺跡に近接する田名遺跡でも表層部をなす一連の沼沢地成堆積物から弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての遺物・遺構群が確認されている (田辺, 1988)。牛屋遺跡の沼沢地成堆積物はこれら低地中央部に位置する遺跡群で確認される沼沢地成堆積物に対比され、一連の低地表層部をなす堆積物とみなされるので、堆積期は概ね一致すると考えられる。牛屋遺跡の C 層下部と D 層から弥生時代中期の土器片が出土しているが、それらは礫や木材とともに背後の斜面から流下した誘導遺物と考えられるので、上記の時期とは矛盾するものではない。

## 3. 木材遺体の産状

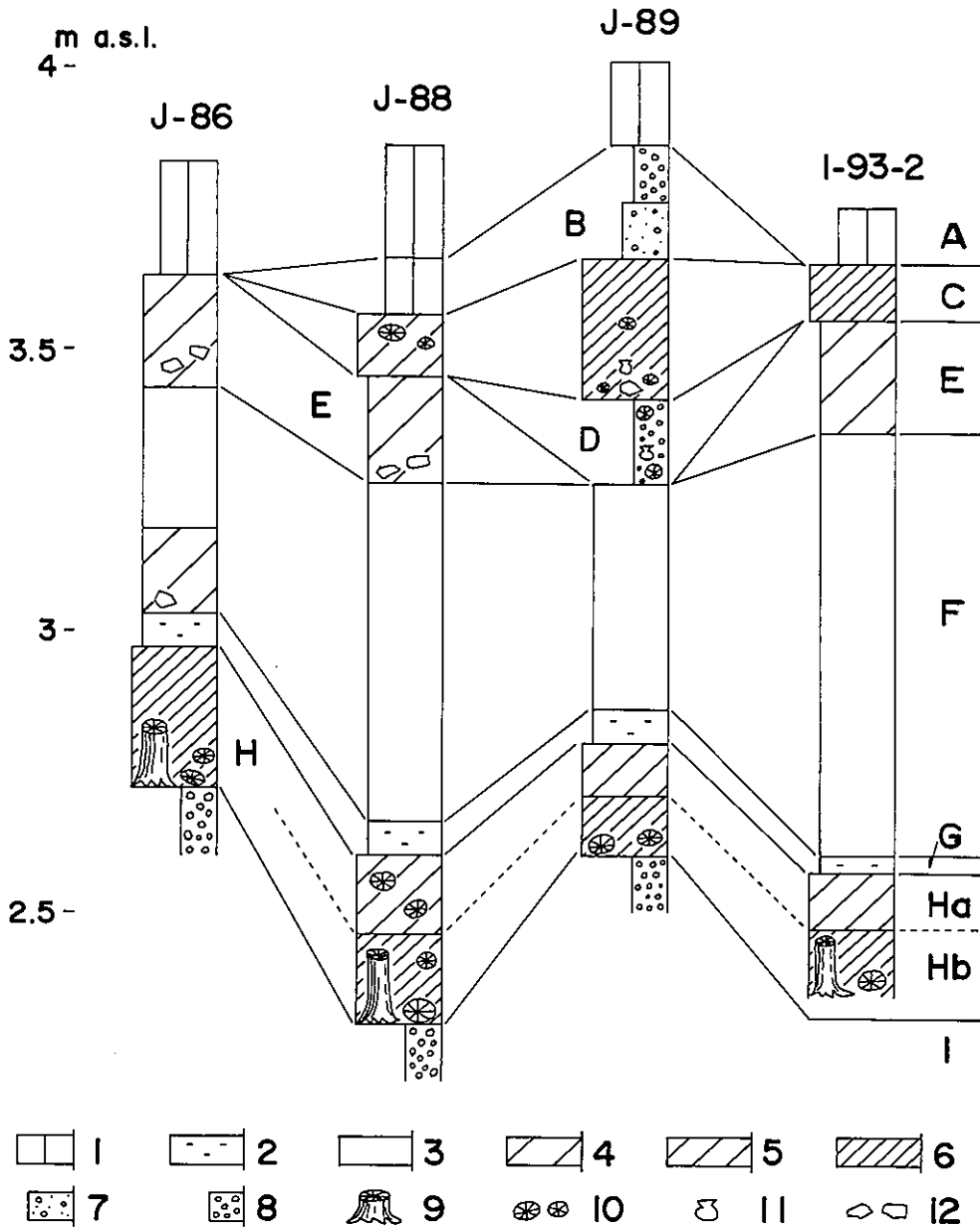


Fig. 2. Columnar sections of the study site. 1, sandy silt; 2, clayey silt; 3, silt; 4, peaty silt; 5, silty peat; 6, peat; 7, gravel and sand; 8, gravel; 9, stump; 10, wood; 11, pottery pieces; 12, accidental gravel.

木材遺体は C, D, H の 3 層から集中的に出土した。これらのうち C, D の 2 層については木材遺体の産状が酷似し、近接する背後の斜面から流下した掃き寄せ遺体群とみられるのに対して、下部の H 層についてはほとんどが現地性を示す立株あるいは根か、人為的に構築した木組み遺構を構成する遺体群である (Fig. 3B)。

上部の C・D 層は礫や土器片を混じえ、モモの核など大型の種子・果実類の遺体を多量に含む。また、

散在する木材遺体は直径 5 cm 前後の細いものが主体である。これらのことは C・D 層の植物遺体群が背後斜面からの掃き寄せ遺体群であることを示唆する。C・D 層からは合計 131 点の木材遺体が採取されたが、それらのうち 127 点は J-89 トレンチから、他は J-88 トレンチからのものである。なお、C・D 層からは計 8 点の加工材片が含まれていた。

H 層の木材遺体は、産状によって立株と根、遺構を成す杭、およびその他の 3 つに便宜的に分けられ

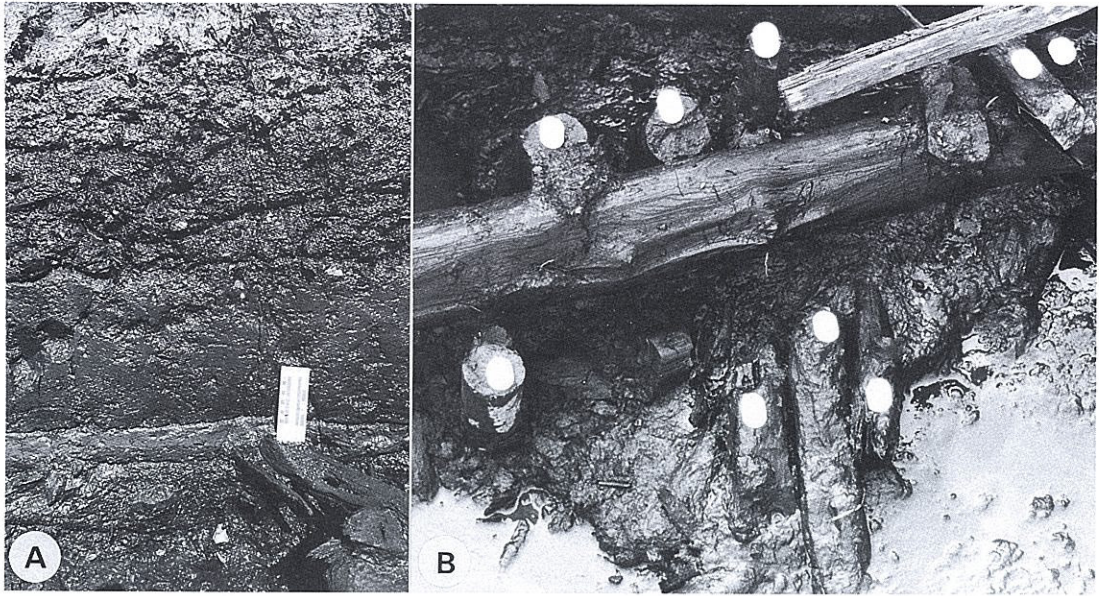


Fig. 3. Photographs of the section of J-89 trench (A) and the occurrence of wood remains of a human dwelling (B).

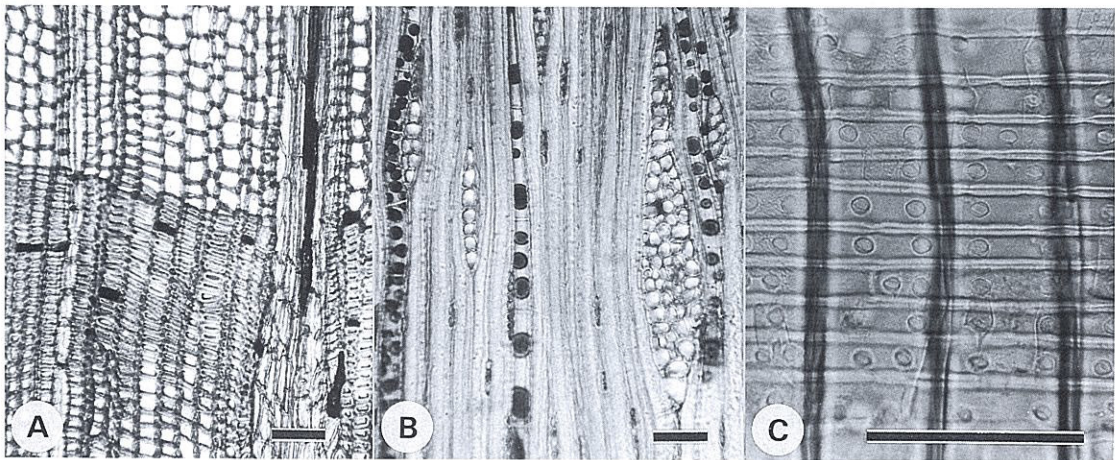


Fig. 4. Photomicrographs of *Cryptomeria japonica* wood remain which has multiseriate rays. A, cross section; B, tangential section; C, radial section; bar indicates 100  $\mu\text{m}$ .

た。その他としたものは、ほとんどが杭と絡み合った渡し材であるが、発掘途中に産状が不明となった可能性の高い横倒しの木材と枝をも含む。それらも遺構をなす木材である可能性が高い。H層からの木材遺体は全部で76点であるが、トレンチごとの内訳は、J-86, J-88, J-89, I-93-2からそれぞれ、28, 14, 19, 15点が得られた。いずれのトレンチからも立株か根を1ないし数点得たが、杭はJ-86, J-88の両トレンチに限られ、前者からは18点、後者からは7点が得られた。立株はJ-86, J-88, I-93-2各トレンチからそれぞれ1, 1, 2点づつ検出されたが、いずれも

根元の直径が50 cm前後の大木であった。これらはI層の礫に根を張って、ほぼ直立の状態で見出された。渡し材あるいは不明の横倒し材はいずれのトレンチからも得られたが、J-89トレンチからは18点ともっとも多かった。

H層の木材遺体は、上位のF層にまで突き出していた立株を除いては、すべてH層をなす泥炭に埋没していた。木材遺体の保存性は極めて高いので、泥炭による埋没との時間差はさして大きくないと見積られる。

Table 1. List of the wood remains obtained from the H bed and the C and D beds.

Taxa	H bed			C and D beds		
	Stump and root	Stake	Others	Artifact	Nonartifact	
					Stem and branch	Root
<i>Abies</i>					1	
<i>Pinus densiflora</i> SIEB. et ZUCC.					4	
<i>Cryptomeria japonica</i> (LINN. f.) D. DON	8	2	16	4	11	
<i>Thuja standishii</i> (GORD.) CARR.			5		1	
<i>Chamaecyparis</i>			1		1	
Cupressaceae			2		2	
Conifer			2		1	
Total conifers	8	2	26	4	21	
<i>Salix</i>		4			13	
<i>Juglans ailanthifolia</i> CARR.					1	
<i>Carpinus</i> sect. <i>Carpinus</i>			1		3	
<i>Alnus</i> subgen. <i>Alnus</i>		8	5		9	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>					10	
<i>Castanea crenata</i> SIEB. et ZUCC.					3	
<i>Castanopsis</i>		2			11	
<i>Zelkova serrata</i> (THUNB.) MAKINO			1		1	
<i>Celtis</i>					3	
<i>Aphananthe aspera</i> (THUNB.) PLANCH.					1	
<i>Machilus</i>		1				
Lauraceae					1	
<i>Albizia julibrissin</i> DURAZZ.					1	
<i>Sapium japonicum</i> (SIEB. et ZUCC.) PAX et HOFFM.					3	
<i>Ilex</i>					1	
<i>Acer</i>		3	1		2	
<i>Aesculus turbinata</i> BLUME	3	1				
<i>Camellia</i>		2	2	1	20	
<i>Cleyera japonica</i> THUNB.		1		1	8	
<i>Vaccinium</i>					2	
<i>Fraxinus</i>			5		4	
<i>Callicarpa</i>				2		
Diffuse-porous wood					3	
Total broad-leaved trees	3	23	14	4	100	2
Total specimens	11	25	40	8	121	2

## 木材遺体の樹種同定

## 1. 試料採取と標本

試料はC・D層とH層の2層準に分けて採取した。C・D層を一括したのは、両層にまたがって出土するものがあること、産状が両層を通して著しく違わないことによる。C・D層の試料はJ-89, J-88両トレンチの側壁から直径1cm以上のものをすべて採取した。これに対してH層の試料は、J-86, J-88, J-89, I-93-2すべてのトレンチの掘り下げ面に露呈しているものをほぼすべて採取した。採取試料数は、上記の産状に示した通りである。

同定のための木材組織プレパラートは、剃刀にて横・接線・放射断面の3方向切片を切り取り、ガムクロラルに封じて作成した。試料およびプレパラートはすべて大阪市立大学理学部植物分類系統学研究室に保管してある。

## 2. C・D層の樹種同定の結果

Table 1に示したように、加工痕が認められない標本123点は、26分類群と不明散孔材1種に同定された。標本数の割に分類群数が多いのが特徴である。針葉樹は21点、7分類に同定された。スギが最優占し、アカマツ、ヒノキ科がこれに次ぐ。落葉広葉樹は43点、11分類群に同定された。ヤナギ属とハンノキ属がともに優占し、トネリコ属、イヌシデ節、エノキ属、シラキがこれらに次ぐ。常緑広葉樹は56点、8分類群に同定された。ツバキ属は20点で最優占し、シイノキ属、アカガシ属、サカキがこれに次ぐ。ツバキ属は全分類群を通して最も多かった。残り散孔材3点は同一種であるが、落葉性か常緑性か不明である。根材はハンノキ属の2点のみで、他は幹・枝材であった。

加工木8点はいずれも用途不明の小片であるが、

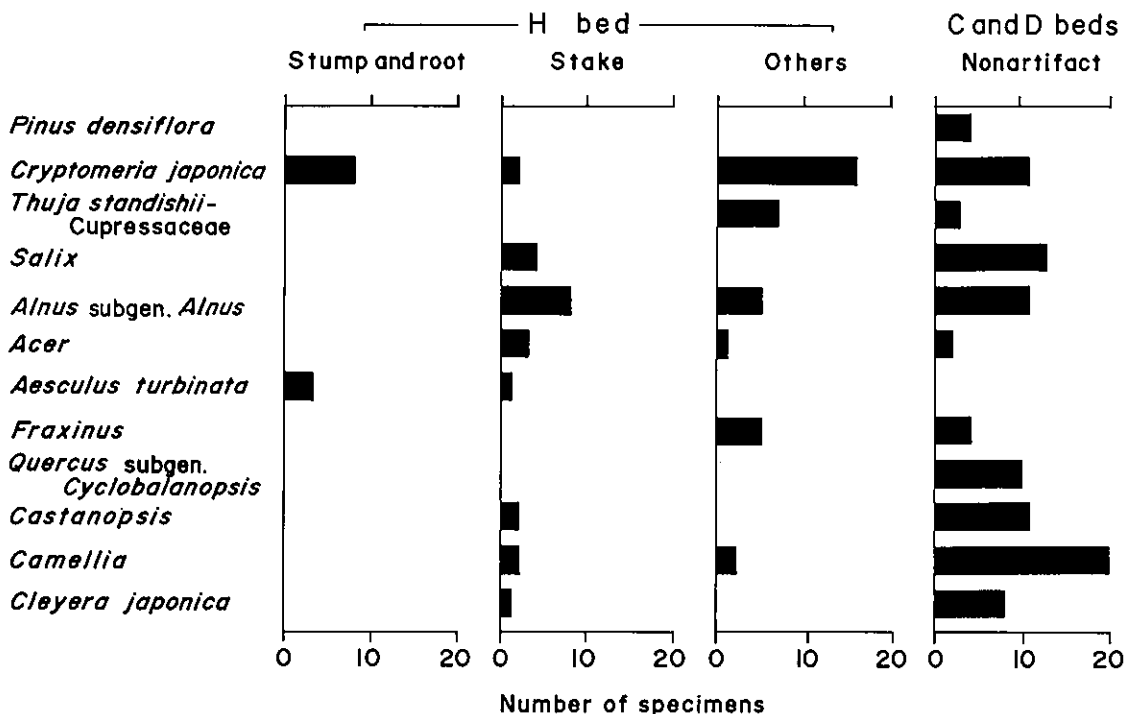


Fig. 5. Diagram of the main wood remains obtained from the H bed and the C and D beds.

4点がスギ, 2点がムラサキシキブ属, 残り各1点がツバキ属とサカキに同定された。

スギに同定された加工木のうちの1点, J-89 トレンチから出土した板状の加工木(標本番号 FUY-10)の組織のごく一部に多列放射組織が観察された(Fig. 4)。多列放射組織は, 接線断面においては2~5細胞幅で, もっとも高いものは25細胞高の紡錘形をしている。単列放射組織の細胞は放射方向に長軸をもつ直方体であるのに対して, 多列部の細胞の外形は大きく不揃いである。また, この近辺の単列放射組織の細胞も外形が不揃いのものが多い。スギをはじめ針葉樹の放射組織は一般に単列であるが, 多列の放射組織が遺体あるいは化石材から観察されたという報告は筆者らの知る限りこれまでにない。

### 3. H層の樹種同定の結果

樹種同定の結果を立株と根, 杭, その他に類別してTable 1にまとめた。

立株と根は11点であるが, 樹種はスギとトチノキの2種のみであった。立株4点はすべてスギに同定された。根7点のうち, 4点はスギに, 3点はトチノキに同定された。J-88, I-93-2 両トレンチでは両種が同定されており, 両種が近接して生育していたことを示唆する。

J-86, J-88 トレンチのみで検出された25点の杭は

10分類群に同定された。スギの2点以外はすべて広葉樹で, ハンノキ亜属, ヤナギ属, カエデ属の順に多かった。アカガシ亜属は見出されなかったが, 常緑広葉樹ではシイノキ属, タブノキ属, サカキ, ツバキ属が同定された。

その他の40点は10分類群に同定されたが, 杭の同定結果とは傾向が異なり, スギをはじめクロベ, ヒノキ属といった針葉樹が点数・種数ともに多かった。何らかの用途で横倒しにされたと考えられる材(ここでは渡し材と呼ぶ)では, スギが10点を占め, 他の分類群が1ないし2点と少数であるのに比較して異常に多い。渡し材のうちJ-86, J-88 トレンチからトネリコ属が各1点同定されたが, 産状から同一の渡し材ではないかと考えられていたもので, 樹種の一一致からその可能性が一段と高くなった。

### 考 察

#### 1. 加工木と非加工木の樹種構成

多くが遺構を構成するH層の木材遺体群と, 掃き寄せ群集とみられるC・D層のそれとは, 樹種構成に大きな違いが見られる。Fig. 5は主要樹種と産状および用途ごとの標本数を比較したものであるが, C・D層では多種類の樹種が針葉樹・広葉樹を問わず雑多に検出されるのに対して, H層では産状および用途によって樹種・標本数ともに固有の傾向が見られ

る。すなわち、杭では針葉樹のスギも認められるが、広葉樹がまんべんなく検出される傾向がある。渡し材を多く含むその他では、広葉樹を数種含むものの標本数ではスギをはじめとする針葉樹が卓越する傾向があり、Table 1からも明らかなように針葉樹の種数が多い。これは、C・D層の木材遺体群が堆積域の背後に生育していた植物群に由来するのに対して、H層のそれが人為的に選択されたものであることを如実に示している。

H層で見られるような加工木群の樹種構成と標本数の偏りは、近接する田名遺跡の弥生時代から平安時代にわたる加工木群の樹種同定の結果（鈴木・能城, 1988）や、京都府北部の中郡峰山町の古墳時代前期の古殿遺跡出土加工木群の樹種同定結果（島地・林, 1988）でもすでに指摘されている。両遺跡ではともにスギ加工木の割合が異常に高く、田名遺跡では74.3%、古殿遺跡では84.8%を占める。また、両遺跡ともスギ材が異常に多いにもかかわらず、杭にはスギのほかにも数種の広葉樹が用いられており、牛屋遺跡の場合とも共通する傾向である。牛屋遺跡の加工木に占めるスギの割合は両遺跡に比較してかなり低い、これは両遺跡では土木建築用材とともに多量のスギの生活具材が出土しているのに対して、牛屋遺跡では皆無に等しいためであろう。

## 2. 古植生と古地理

H層とC・D層の木材遺体は上述のような性格の違いこそあれ、樹種構成はかなり共通しており、基本的には遺跡および周辺の植生に大きな違いは無かったと考えられる。そこで両層の樹種構成を総合すると、低地から背後の斜面にかけての植生は、スギ、クロベ、ヒノキ属、アカマツといった針葉樹、ヤナギ属、イヌシデ節、ハンノキ亜属、トチノキ、シラキ、エノキ属、ムクノキといった落葉広葉樹、アカガシ亜属、シイノキ属、タブノキ属、ツバキ属、サカキといった常緑広葉樹を主要素とするものであったと考えられる。これらの樹種のうちスギとトチノキは、複数のトレンチから立株と根が検出されたので、礫からなるI層形成後H層形成までかその堆積期に礫層上の低地に生育していたことは明らかである。また加工木にも多用されているハンノキ亜属は、C・D層から根材が検出されているので、すくなくとも低地に生育していたと言える。アカマツは人間の植生への干渉と深く関わる分類群の一種であるが、上部のC・D層からしか検出されていないので、H層の時期から存在したかどうかは言及できない。

礫からなるI層上の低地にスギの大木が生育していたことは、すでに人為的に改変されつくした低地のかつての景観を知る上で、また、スギの古生態を

知る上でも貴重な情報である。高原ほか(1988)は、三方五湖低地南部の岩屋(彼らは誤って黒田としている)から約3000年前のスギの大木からなる埋没樹群をすでに報告しているが、このことを併せ考えると、かつての低地には大木からなるスギ低地林がふつうに成立していた可能性が高い。牛屋遺跡ではトチノキの共存が認められたが、これは本遺跡が山地斜面に近接していたためであろう。

鈴木・能城(1988)による田名遺跡の樹種同定の結果は加工木のみについてのものであるが、主要な樹種はほぼ一致しており、牛屋遺跡で検出されなかったものにアスナロ、ウツギ、ユズリハ属、クマノミズキ類があるのみである。このことから、周辺域には基本的には上述のような樹種からなる植生が広く分布していたと考えてよいであろう。ただ、田名遺跡出土の多量のスギ加工木から類推されるスギ母植物群が山地斜面にもふつうに生育していたかは今後の検討課題であろう。なぜなら、牛屋遺跡の掃き寄せ遺体群にはかなりの照葉樹林要素が認められ、それらがスギとは生育域を異にしていた可能性もあるからである。

ところで、H層とC・D層の泥炭層を含む本遺跡の一連の堆積物は、三方五湖低地における古地理変化を記録していると考えられる。すなわち、H層から見出されたスギ立株や人為的な遺構は、灰白色粘土質シルトおよび灰色シルトによって完全に埋没しており、この間に泥炭地から沼沢地あるいは湖沼への急激な堆積環境の変化があった。さらにその後、灰色シルトの埋積の進行とともに徐々に泥炭地化が近み、E層からC層にかけての一連の泥炭・泥炭質堆積物をもたらした泥炭地に変化した。こうした一連の変化は東南方のえご遺跡でも確認されている(田辺, 1988)ので、低地一帯に見られた古地理変化であった可能性がある。そうだとすれば、湖面変動を含む湖盆の古地理変化を示す可能性がきわめて高い。三方五湖は、寛文地震(1662)の際、西側への傾動が発生したと考えられており(岡田, 1984)、活断層である三方断層を東縁にもつ三方五湖の低地の基本形態から歴史・先史時代を通じて同様の傾動が地震時に繰り返されてきたと類推される。したがって、牛屋遺跡のシルト質堆積物による急激な埋積は、歴史、先史時代における大地震の際の傾動を示唆する可能性がある。その点で、埋没林や埋没遺構としての埋没面を面的に復元するとともに、埋没の時期を明確にすることは意義がある。

## 引用文献

岡田篤正, 1984. 三方五湖低地の形成過程と地殻運動。「鳥浜貝塚1983年度調査概要・研究の成果一編



文前期を主とする低湿地遺跡の調査4」：9-42、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館、島地 謙・林 昭三、1988、古殿遺跡出土製品の樹種、「京都府遺跡調査報告書第9冊」：98-105、京都府埋蔵文化財調査研究センター。  
鈴木三男・能城修一、1988、田名遺跡出土土製品の樹種の調査結果について、「田名遺跡」：56-70、福井県三方町教育委員会。  
高原 光・伊藤孝美・竹岡政治、1988、約3,000年前のスギカミキリ被害材と当時の森林環境、日本

林学会誌 70 : 143-150。  
高原 光・竹岡政治、1987、丹後半島乗原周辺における森林変遷—特にスギ林の変遷について、日本林学会誌 69 : 215-220。  
田辺常博、1988、田名遺跡の立地と周辺の遺跡、「田名遺跡」：1-3、福井県三方町教育委員会。  
安田喜憲、1979、花粉分析、「鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1」：176-196、福井県教育委員会。(Received Dec. 15, 1989)

○ 伊東 博さんのご逝去を悼む (黒沢美房) Yoshifusa KUROSAWA : Obituary of the Late Mr. Hiroshi ITO

本誌が「北陸の植物」であった時からの会員の伊東博さんが、平成元年3月26日、浜松市の自宅にてご逝去されました。81歳でした。自然を愛し、お庭にいろいろの植物を栽培してあったから、まだまだ研究を続けるつもりであったろうに残念です。謹んで哀悼の意を表します。

お生まれは浜松市で、浜松一中(現在浜松北高)をご卒業になり、北海道大学をご卒業後、静岡県東部の旧制中学校の理科の教職に就かれました。その後、当時日本の領土であった台湾にて、台北の公立中学校の教師、台北大学の講師等をなされました。終戦で日本に帰られ静岡県西部の浜松農業高校、磐田農業高校、天竜林業高校に勤務され、退職後は悠々自適の生活をされておりました。

私は磐田農高の隣りの磐田南高の生物の教師をしていたので、親しくしていただくようになりました。或日、突然私の教室に來られ、台湾で採ったヤブレガサウラボシを誰かに貸してやるのだと、ついでに私にも見せて下さいました。私はその珍品の印象と、伊東さんのうれしそうなお顔がいまだに忘れられません。その他にも台湾産のシダの標本を相当持っていると話しておりましたから、あちらでも可成り歩き廻ったことでしょう。

静岡県理科教育西部支部では、「遠州生物」という会員雑誌を出版したことがあり、その創刊号(昭和29年3月発行)では伊東さんは「四ツ池、一ツ池附近の植物について」という論文で、浜松市内の湿地の珍しい植物、キリガミネトウヒレン、ミカワバイケイソウ、ミカワシオガマ、ピロウドノリウツギ等の分布を記録されております。第2号(昭和34年3月発行)では2編発表され、「白倉峽の植物」では秋葉ダム附近の峽谷のエンシュウシャクナゲ、アカヤシオ、カインンサラサドウダン其他の分布を記しておられ、もう一方の「新変種キバナハナネコノメソウに就いて」では、本人が採集されたハナネコノメソウの変種キバナハナネコノメソウの標本が、タイプ標本になったことを書いております。

静岡県湖西市神座のトキワマンサクの群生地(静岡県が日本の北限)が、県の天然記念物に指定保護されておりますが、この実現に伊東さんが一役加わったということを知っております。遠州の植物に詳しい伊東さんを失い残念でなりません。御功績を思い出しながら、心から御冥福をお祈りいたします。

○ 小倉洋志、久保田秀夫、田代俊夫、加藤 仁、杉田勇治、伊東 徹、神山隆之、鈴木文益、野口達也、桜井雅幸、吉川 誠、山村 剛共著 八溝山地の植物相(栃木県立博物館研究報告書、第7号、八溝の自然3)。栃木県立博物館、平成元年3月31日発行。B5判、448+8(写真)頁。非買品。

八溝山地は関東地方北東部に位置し、主として栃木県と茨城県の県境を南北に走る全長約100kmの山地で、その北端部に主峰八溝山(1,022m)、南端に筑波山(875m)がある。

この地域の植物相に関する報告は1940年代より多数あるが、断片的なものに留っていた。本書は上記のように多数の方々協力によって、八溝山地の植物の組成と特徴を解明することを目的に、八溝山塊から雞足山塊に至る八溝山地中・北部の維管束植物を対象に、1982年以来行って来た調査のまとめとして出版されたものである。内容はI 緒言、II 気候、III 主要調査地とその植生、IV 八溝山地産維管束植物目録、V 特記すべき植物、VI 八溝山地の植物相の構成、VII 考察、VIII 摘要となっている。

○ 小国生物友の会 小国の植物 平成元年8月31日発行。A5判、248頁。売価不詳。

小国町は新潟県のほぼ中程にある盆地で、積雪量が多い。最高峰でさえ500m余に過ぎないから、所産の種類はおよそ800位である。本書はこの中より選ばれた500種のカラー写真を、しだ、木、春(草)、夏(草)、秋(草)の5項目にわけて編集されている。(里見 信生)